

る探を



文 小林金次郎
書 熊田大三

大桃より只見へ

翁早くこの山地方の水田經營者にして意行篤き平野文治翁が自ら八十六才の老軀をもつて大川屋に訪ねて下さつたのはまことに恐ろの至りである。翁の事故に就ては未だ詳しく知られてはゐない様であるから是非確を求めて書かなければならぬ。翁は白髪まじりに目をしばたきながら私たちの訪問に感泣し、熱茶を添て喜んで呉れた「お丈夫ですな」と言へ「はア八十八までは生きてえとしますだ」と答へられる。今日は

ひの影がばいに充ちてゐる。村の入口にある翁の水田事業を思ふべき水田記念碑の前で翁をカメラに納めたことは略記すべきである。

◆午訖九時十分、大桃の里を立つ。

里へ下れば次第に水も温み、風も暖かくなる。仙境に遊んだ我々、下界の繁候に臨むべきな心算に思はれる、オットこれは旨ひ過ぎた。葎やかなる枝枝飯所への荷道をゆけば珍らしくも鯉が鳴いてゐる。旅へ出て始めてきく聲かし

い隙ではある。九時四十五分、純桃色の雲に隠れた小立岩の巖に又こゝで星四郎兵衛氏へ敬意を表して直ちに出發、途中内川に一頓して一気に白澤へ向ふ、白澤の部落に入る少し手前の宿郷は先頃の大水に流された半が無事に破壊されて、その跡に丸太が並べてある。白澤にて食糧を攝る、十二時卅分

◆こゝより自動車に乗り午後一時三十五分白澤を發し、二時十分大宮村山口へつく。こゝで大宮村宿郷を訪問して村長 飯谷五郎氏と語り、次いで山口營林寮を訪問すれば、所長片野良藏氏は手を引かんばかりにして私たちを導き入れ有る三々宮宿郷を兜せて下さる。こゝで私たちは甘藷コーヒー工場の果を恢復したのみならず、福島縣警部補面川新繁氏を訪ね桃の割ものをしてこゝを出る。時に四時〇五分。

◆四時五十分架取りの河原岩に車をとどめスケッチをなす、大岩石の屹立するところ秋の紅葉は雲山の景に似て面白からう。こゝにある八穴は弘法大師が觀音の祀所を求めて徘徊せしところといふ。これより工事中の伊南川を渡り、ローマンスな草の里を過ぎて、石川冠者有光で有名な長閑の里を左に見て、七時十分見

A black and white photograph of a traditional Japanese shrine building. The building features a steeply pitched, thatched roof and a prominent entrance. To the right of the main building, there is a smaller structure with a similar roof. In the foreground, a low wooden fence runs across the frame. The background is filled with dense foliage and trees, suggesting a rural or forested setting. The overall style is that of a historical photograph.

A black and white photograph of a suspension bridge spanning a river. The bridge features a large central arch and two smaller side arches. In the background, there are hills and a small building on the left bank. The image is grainy and appears to be a reproduction from a book.

ス。ケ。ツ。チ
上三石神社、(右下)川
(左下)常盤橋

(上)三石神社、(右下)川鏡
岩(左下)常盤櫓

只見小唄
小林金次郎

ホーイ ホーイ
船を走らなれ 塔虎の鯉
きりより自説の鯉にころ
ホニニ ホニニ さうかいな
ホーイ ホーイ

ホーイ ホーイ
神鹿鳴くから 雪蟹の橋に
待てば夜金の月がでる
ホニニ ホニニ さうかいな
ホーイ ホーイ
雪は丹鬼の名どころ
消えた後から花が咲く
ホニニ ホニニ さうかいな
ホーイ ホーイ

ホーイ ホーイ
痛生ヶ嶽に鳴くうぐいすに
越後さけども只鳴くばかり
ホニニ ホニニ さうかいな
ホーイ ホーイ
鶴の神社是三軒詣り
岩を驚く初ちぎり
ホニニ ホニニ さうかいな
八月二日只見にて

く縁を求めんとする男女は数知れぬ。密にこゝに詣ると云ふ。この窟は大餘谷で多孔質の岩石の中に記られてあり。この岩石に小孔を見つけて縁を通すときに縁が破壊されたと稱して實に無数の縁が破くほど巧妙に通れてゐる。又この洞前の小橋を結んでも御利益はあると言ひ、鞍山結ばれてゐる。只見、伊南の念流すところは長い只見の町を見下して縁を求めぬ。實にこそ如何にローマンチタな情景であらう。

◆ 縁れば「いづみや」にて盛大なる聖地の宴が張られる。置系所長大越繁章、川島信雄、目黒明、奥野市、渡邊正二、香家得三郎の諸氏渡邊村長らと大宴となりて夕月の出づるまで語り続け、曉空澄れば常盤楼へ只見の夕月を町に出る。

常盤橋

る探を



只見より柳津へ。

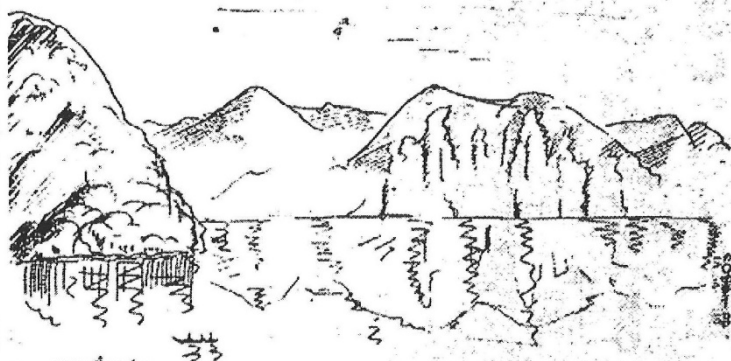
第九信 八日二日
 △：▲懐かしき只見の一夜を新
 作「只見小唄」に託し思ひを残し
 上を滑る。
 かれてゐる。九時五十五分頃大
 で自動車に乗かへて再び車は淀の

て箱を出る。村はづれまで坂井市
三郎氏の財送りを受け、自動車は只
只見川に添ふて走りゆく。南側は山
右は溪流、岩をかむ水と山をゆく
眞夏の雪とがすこい。藪を以て摘
川の増水が常に村民の努力による。

櫓を乗ふからである。この炎入の河原には笠原重女が櫓を裸で、水浴びをしてゐて、私たちの姿を見付けると一勢に「醜態——」と叫ぶ。十一時川口へ入つたが坂の上で自衛隊に故障がおきてしばらく車を下りる。こゝで友達佐伯美君の家を訪ねれば、佐君の母君が私たち一行を快く迎へてしきりにサイダーの口を抜いてすゝめられる。

こは關東屋といふ二階造りの宿で、野尻川を目の下にして、遠く見川の合するところを見る感じの頗る良い宿である、この川からは鮎が澤山釣れると云ふから、沼澤沼の旅行者はこの關東屋で一息するのよいであらう。一時自動車が目つたので急いで水沼へ向ふ。

▽：▲既に川口には沼澤小學校校長菅川繁雄氏、沼澤沼村助役井ノ井文四郎氏の遇へを受けたが、沼澤沼へは井ノ井氏の案内で向ふ。三人で水沼から「上の山」の頂に登り、見下せば嘗て閑寂になつた水沼橋を遙かに、向ふを沼田行



道か隈々と白い細道を走らせてゐる。この里から峠材が澤山出る。成程材は脚の林にかこまれてゐるが、これはこの地の北大竹半左衛門が金借りて生命を投げ捨

て、田したところ、この高地も沼澤の水に恵まれて稲が實つてゐるから、湖南に眠る太竹氏も満足の意味を浮べてゐるであらう。二時四十五分、沼澤への前村長春林一郎、馬猪猪俣一氏ら船に乗る。出船に際して沼澤の仙人は邊邊由次郎翁に還ふ仙人に就ては沼の話を共に後に述べたい。沼は南に高森、西に鯉、赤岩の山々をめぐらし、水は修くまで澄んで船の前方に鱗が飛上つては銀色の鱗を鑑やさせる。時沼の古刀のうらさびに對し沼澤は鏡刀のうらさひがある、沼師神社を詣で、天、池島太郎の澤を見て上陸、

須崎時雨て 月さへ見えぬ
 望る白帆も灯の台國
 鰯もねむたい 巴の渦よ
 熊鷹寺から鑑ばかり 鑑ばかり
 オイイ ヨーイ
 沼の御前は横鑑姫よ
 トントカラリン 鹽宮の底へ
 鰯の浦島 鰯でゆく 鰯でゆく
 (昭和六年八月二日)
 日沼澤沼にて

嶺の彫化所を見學して下の吉野や
 で嶺の脚趾走に從る、運のよいこ
 とには今日は招祭りの日であり、
 又丑の日でもあると言ふ。
 等を辭て途すがらこの村の境
 等者若林善次翁の碑に立寄り宮の
 下へ急ぐ。約二里の間、只見川の
 或は激し或は靜むところを見下し
 つゝ重い足を引き引き最後のコ
 スをたどる。宮の下に入れば既に
 菰葎、七時四十五分を立つて
 眞暗の峠を下る。
 〽ハハ時半峠に入り虚空感
 の下内田原に泊る。

沼澤沼の風景